

第 260 回(6 月)

知的生産性向上への取組み

千代田化工建設株式会社 勤労部 部長代理 碓明生氏

製造設備や目に見える商品を持たず、設計・施工監理・調達のみから成り立ち、しかも海外比率が min50% - max80% と高い。加えて、円高でコストアップとなり、対外競争力が低下。いかにすれば競争に勝てるか。知的生産性を上げる以外に無いと結論。

この中で“時間＝コスト”の共通コンセプトの下に、効率よく知的生産活動に集中出来るように、しかも Time-Conscious が労働強化になりかねない危険を含みながら「Be Smart」運動として、日常のムダを省くことに的を絞って全社運動として展開した。活動単位を部単位とし、実行手順・展開方法は部に任せ、やり方は自由だが責任は部レベルの長がとる事とした。小集団活動とは明確に区分した。各運動本部ごとにメインテーマを提出させた。多かった順位は①会議時間の短縮②電話使用時間の短縮③ワープロ清書の効率化④文書作成の効率化の順位であった。1年間の成果は、あえて計算すると、削減コストが7億円強、1人当たり38万円強となった。

“知的”生産は、ムダな時間をより創造的な活動に振り向けたと解釈・評価した。したがって、具体的に利益や残業時間短縮という定量的な成果としては表面に出なかったが、社員の意識を高めたものと確信する。